

主 題：旧約に見る神の救いのご計画 11
聖書箇所：創世記24章

きょうは、旧約に見る神の救いのご計画の11回目になります。大体に1年に2回お話をさせていた
だいていますので、5年ぐらいかかっているということですが、創世記24章からきょうの学びをさせ
ていただきたいと思います。いつも申し上げていることですが、聖書は旧約聖書と新約聖書の両方合わ
せて一つの書物ですから、どちらがなくてもならないということを私たちは学んできています。旧約聖
書の中には新約の、そして新約聖書の中には旧約の教えが含まれているということで、それぞれが助け
合って、補い合って1冊の本であり、主題は救い主であるイエス・キリストを描いています。

ローマ1：2-3では、「この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、
御子に関することです。」と書かれています。預言者たちを通して約束された御子すなわちイエス・キリス
トに関するものであると。またローマ15：4では「昔書かれたもの（すなわち旧約聖書）は、すべて私
たちを教えるために書かれた」と記されています。それによって私たちに「希望を持たせるため」であるとい
うわけです。またヨハネ14：6では「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」とイエス・キリス
トは言われました。「わたし（イエス）を通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」、
救い主が来られる、そして救い主が来られた、これが旧約聖書、新約聖書ですね。この私、イエスを通
してでなければだれひとり父なる神のもとに行くことはできないとイエス様は言われたのです。

序論：神はアブラハムの信仰を義と認められ、ご自身による一方的な契約を結ばれた。神は常にアブラ
ハムとともにあり、何も恐れることがないと言われた。そして時が至って約束の子を与えられた。

1. アブラハムへの祝福 創世記12：1-3

私たちは5年間、創世記1：1からずっと学んできましたが、今は特にアブラハムについて学んでい
ます。アブラハムへの祝福が創世記12：1でなされました。

- 1) 神が示される地へ行け。
- 2) 大いなる国民とする。
- 3) あなたの名を大いなる者とする。
- 4) 地上のすべての民族はあなたによって祝福される。

このような約束を神様はアブラハムに対してなされたということでした。

2. アブラムの心配事 創世記15：1~

3. 信仰の義認と神の契約 創世記15：6

そして創世記15：6ではアブラハムは神を信じた。そしてそれによって神様は彼を義と認められた。
信仰の義認と神様の契約がなされたのです。

4. アブラム、アブラハムへ 創世記16-17章

そしてその名前をアブラムからアブラハムへと変えるようにと言われました。

5. イサク誕生 創世記18-22章

そしてやがて神様がアブラハムがああウルの、そしてカナンを出立するに当たって約束された一つのこ
と——大いなる国民とする、それには子どもが必要でしたが、アブラハム75歳、サラが65歳の時、
彼らの間にはまだ子どもがいませんでした。そしてやがてアブラハムが100歳、サラが90歳にな
った時に、ひとりの男の子が与えられ、その名をイサクと名づけました。この神様によって約束された
ひとり子イサク、しかし、残念ながらアブラハムは自分の力で神様の約束を達成しようとし、先にイシ
ュマエルという男の子をもうけました。エジプトの奴隷女によってその男の子を誕生させたのですが、
神様の約束はアブラハムとサラとの間にひとりの男の子を与えるというものでした。時満ちてアブラハ
ムに男の子が与えられたけれども、神様はこのイサクを全焼のいけにえとしてささげよと言われたと創
世記22章に記されています。アブラハムはイサクを伴ってモリヤの地へ出かけていきます。彼が準備
したものといえば、イサクに背負わせたたきぎと火、アブラハムは片手に刀を持って行きました。しも
べたちをその場に残して三日かかる約束のモリヤの地へ行く途中でイサクはお父さんに尋ねます。聖書
を読みますと、イサクが発した声というのは、恐らくここだけかと思うのですが、彼は「お父さん。」と
尋ねます。「何だ。イサク。」これから全焼のいけにえを捧げるのですが、全焼のいけにえの羊はどこに
ありますか？アブラハムは神様が準備されるから心配しないでいい。短い会話でしたが、イサクはたっ
たこれだけ聞いて、わかったともわからないとも何も言わずに父アブラハムに従ってモリヤの地へと歩
んでいったのです。そしてそこへ来てアブラハムが焚き火を準備して、イサクを縛ってその上に寝かせ、
持ってきた刀でまさにイサクのいのちを断とうとしたその時に、神様はアブラハム、あなたの気持ちは

もうわかったと。この愛するひとり子さえ惜しまないあなたの心、私はよくわかったからもうイサクを殺す必要はありません、私がイサクにかわって全焼のいけにえとなる羊を備えます。するとそばに一匹の小羊が準備されていたというのを私たちは見ました。彼らは本当に感謝してしもべたちの待つところへ戻っていきました。ここでアブラハムが捧げたひとり子がまさに神様が私たちに遣わしたイエス・キリストであるということ学んだのが前回でした。

A. イサクの結婚 創世記24章

1. イサクの嫁探し 1-14節

やがて時がたち、23章ではお母さんのサラが亡くなったという記事が記されています。サラは127歳で亡くなった。イサクが37歳の時です。65歳の時から長い間待ちに待ってやっと90歳にして生まれたひとり子。お母さんのサラはどんなにかイサクを愛しかわいがったことでしょう。でもそのような記録は聖書に一切記されていませんし、イサクにしたら本当にかわいがってくれた母親であるサラが亡くなってしまい、悲しみに打ちひしがれたに違いないと思うのですが、聖書はただ母が亡くなったと記しています。

1) しもべへの命令 1-8節

そのような状況の後、24章になるのです。3年後アブラハムがこのように言います。「アブラハムは年を重ねて、老人になっていた。主は、あらゆる面でアブラハムを祝福しておられた」、「年を重ねて、老人になっていた」ということですが、100歳で生まれたイサクが40歳ということは、アブラハムは140歳ですから確かに年をとっていることは間違いありません。アブラハムはこの一人息子のイサク、母親が3年前に亡くなって、そろそろ嫁を取らないといけないなと考えたのです。神様はあらゆる面でアブラハムを祝福しておられましたが、アブラハムはそのことを考えてイサクのために嫁取りをしようと。そこで自分の全財産を管理させていた「最年長の」と書いてありますから、しもべの中でも一番長くアブラハムに仕えていた忠実なしもべにこう言います。「あなたの手を私のももの下に入れてくれ。私はあなたに、天の神、地の神である主にかけて誓わせる。私がいっしょに住んでいるカナン人の娘の中から、私の息子の妻をめとってはならない。あなたは私の生まれ故郷に行き、私の息子イサクのために妻を迎えなさい。」(創世記24:2-4)、イサクに嫁を探して来いと言うわけですが、ただ条件はありますと。

(1) カナン人から娶ってはならない 3節

今私たちが住んでいるこの地、カナン人の娘の中から嫁取りをしてはいけないと言うわけですが、なぜならこのカナン人の地のアブラハム一族以外の人たちは偶像礼拝をしていました。

(2) アブラハムの生まれ故郷で見つけよ 4節

だからあくまで私の生まれ故郷、私の親族のところへ行き、そこからイサクのために嫁を見つけてほしいと言ったのです。この生まれ故郷というと、私たちはウルとカランの二つを考えますが、ここではカラン(またはハラン)です。カランというのはギリシャ語でハランというのはヘブル語です。ここへ出かけて行けと言ったと聖書は教えています。そして、あくまでアブラハムの願いはこの異郷の地の異民族から嫁を娶らないで自分たちの一族の中からイサクの嫁を見つけてこいということです。彼の生まれ故郷は本当はウルですが、その後カランに移り、しばらくそこに住むのですが、父親初め多くの親族はそのカランの地で住んでいたということがわかります。ヨシュア記24:2に「イスラエルの神、主はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムとナホルとの父テラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。』」とあります。紅海から流れて来る二つの大きな川、チグリス川、ユーフラテス川の間にカランという町に住んでいた。「ほかの神々に仕えていた」と書いてあります。この「ほかの神々」の代表的なものは月の神シンです。ウルでもカランでもこの月神シンはテラたちの礼拝対象になっていた。そのようなところですが、その親族の中から妻を見つけて来いと言うのです。

(3) イサクを生まれ故郷に連れ帰るな 6-8節

そして、しもべはその任務を帯びて行くのですが、24:5-6「『もしかして、その女の人が、私についてこの国へ来ようとしないうちに、お子を、あなたの出身地へ連れ戻さなければなりませんか。』アブラハムは彼に言った。」「息子をそこへ「連れ帰らないように気をつけ」よと言います。すばらしい結婚対象がその地においてイサクのために来てくださいますと言っても、そこには行けませんと言われたらどうしましょうかという質問です。アブラハムは、イサクをこのカナン人の地から向こうに連れ戻してはならないと言ったのです。その理由は神様が約束された地がカナンだったからです。確かに異郷の地でしたが、アブラハムにとっては神の約束された契約の地であるということで、イサクはここにいさせなければならぬと言ったのです。24:7「私を、私の父の家、私の生まれ故郷から連れ出し、私に誓って、『あなたの子孫にこの地を与える。』と約束して仰せられた天の神、主は、御使いをあなたの前に遣わされる。あなたは、あそこで私の息子のために妻を迎えなさい。」と言うのです。

アブラハムの信仰は、神様が「あなたの子孫にこの地を与える」と私に誓ったのだから、神は御使いをあ

なた、しもべの前に遣わせてきつと息子のためにいい妻を見つけることができるようにされるというものでした。8節で仮に「もし、その女があなたについて来ようとしなければ、あなたは私の誓いから解かれる。ただし、私の息子をあそこへ連れ帰ってはならない。」と、6節でも言いましたが、あの偶像礼拝のはびこるカランの地へ連れ帰ってははいけないと2回も言うのです。

2) しもべの祈り 10-14節

その命を受けて、しもべは主人と誓いをなします。そして10節「しもべは主人のらくだの中から十頭のらくだを取り、そして出かけた。また主人のあらゆる貴重な品々を持って行った。彼は立ってアラム・ナハラムのナホルの町へ行った。」というのです。「アラム・ナハラム」というのは、別名をパダン・アラムと言います。チグリス川、ユーフラテス川の間の中あたりにパダン・アラムというところがあって、カランという町がありますが、このように二つの川の間、これがパダン・アラム、別名ここに記されている「アラム・ナハラム」という所です。

そして、しもべはそこへの旅を続けてやって来ましたところ、11節を見ると、時は夕暮れ、多くの女性たちが水を汲みに来ます。しもべはその町の外の井戸のところへらくだを伏させ、神様に祈るわけです。これからたくさんの女性が井戸の水を汲みに来る。だれがイサクのために神様が準備してくださった女性なのでしょう。彼の祈りは12節「私の主人アブラハムの神、主よ。きょう、私のためにどうか取り計らってください。」、このしもべの祈りの対象は「アブラハムの神、主」でした。アブラハムを義と認めた全能の主、全能の神、「きょう、私のためにどうか取り計らってください。私の主人アブラハムに恵みを施してください。」、彼が求めたのはあくまでアブラハムのための恵みでした。自分の功績を求めたわけではありません。主人のアブラハムがその一人息子のために願っていたその願いが聞き届けられますようにと、彼は祈ったのです。

2. ひとりの乙女現れる 15-27節

1) リベカ 15-16節

不思議なことにその祈りがまだ終わるか終わらないかのうちに、すぐにひとりの女性がその井戸に水を汲むためにやって来たと、15節に記されています。「リベカが水がめを肩に載せて出て来た。リベカはアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘であった。」とその身元を明らかにしています。アブラハムにはハランとナホルという二人の兄弟がいましたが、ハランは亡くなり、その子どもがアブラハムと一緒にウルを出た口トです。もうひとりの兄弟ナホルの奥さんミルカの子、ベトエルの娘であったと。もちろんこのしもべは知りません。16節「この娘は非常に美しく、処女で、男が触れたことがなかった。彼女は泉に降りて行き、水がめに水を満たし、そして上がって来た。」というのです。アブラハムのしもべは、13-14節に戻りますが、「ご覧ください。私は泉のほとりに立っています。この町の人々の娘たちが、水を汲みに出てまいりましょう。私が娘に『どうかあなたの水がめを傾けて私に飲ませてください。』と言ひ、その娘が『お飲みください。私はあなたのためにも水を飲ませましょう。』と言ったなら、その娘こそ、あなたがしもべイサクのために定めておられた」その娘なのだ祈るのです。「このことで私は、あなたが私の主人（アブラハム）に恵みを施されたことを知ることができますように。」と。非常に具体的にどのような女性がイサクの妻であるのかということをお祈りしたのです。しもべが考えたわけではないと思いますが、彼のこの祈りを見た時に、このしもべが何を望んでいたか、イサクのためには心の優しい女性を神様が与えてくれるように。遠い旅を続けてきたのは見ればわかりますから、水を飲ませてくださいと言ったら、普通はどうぞと言いますよね。もう、せっかく汲んできたのにだめと言うわけではないです。でも言わなくてもあなたが連れてきたららくだにも水を飲ませましょうと言う女性が神様が示された女性でありますようにと言うわけです。らくだは10頭もいました。しもべが飲んでも、ほかの従者が飲んでも大した量ではないのですが、この女性はやがてすべてのらくだに水を飲ませることになるのです。水を汲んでは水槽に、水を汲んでは水槽というわけで、大変な重労働になるのです。

2) しもべとの会話 17-21節

この娘リベカは水を汲みに来ましたが、しもべは走って行って彼女に言います。17-18節「あなたの水がめから、少し水を飲ませてください。すると彼女は、「どうぞ、お飲みください。だんなさま。」と言って、すばやく、その手に水がめを取り降ろし、彼に飲ませた。」とあります。19節「彼に水を飲ませ終わると、彼女は、『あなたのためにも、それが飲み終わるまで、水を汲んで差し上げましょう。』と言った。」、何と心の優しい女性であったかというわけです。20節「彼女は急いで水がめの水を水ぶねにあげ、水を汲むためにまた井戸のところまで走って行き」と、それを繰り返して「全部のらくだのために水を汲んだ」というのです。しもべはこの様子をじっと見ていたということが21節に記されています。神様が本当に私に示してくださった、私が祈った女性に間違いはないか仕草を見ていたのです。祈りのとおりでした。途中でやめたり、疲れた素振りを見せたり、そういうことは一切なかった。それでしもべは彼女に言うわけです。23節「あなたは、どなたの娘さんですか。どうか私に教えてください。あなたの父上の家には、私ども

が泊めていただく場所が」ありますかと聞くわけです。彼女の答えは「私はナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘です。」、ここで初めてしもべは主人のアブラハムから託されてきた、まさに故郷の親族の一番近いところの娘であるということがわかったのです。

そして、彼は本当にこの女性が祈っていた、願っていた女性であったことを知り、「重さ一ベカの金の飾り輪と、彼女の腕のために、重さ十シェケルの二つの金の腕輪を取」ってつけたのです。「泊めていただけますか？場所がありますか？」と言った時に、彼女は「どうぞ」と言いました。泊めるだけではなく、「わらも、飼料もたくさんあります」、らくだのえさになるものもありますよ、どうぞいらっしやってくださいと。26節を見るとそこでもしもべは「ひざまずき、【主】を礼拝して、言った」というのです。彼が一番先にしたこと、本当に喜びがあった時に何をしたかという、神様に祈った、礼拝したのです。「私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は私の主人に対する恵みとまこととお捨てにならなかった。主はこの私をも途中つつがなく、私の主人の兄弟の家に導かれた。」と。一切のむだなく神様はこのしもべを目的地へ、目的の人へと導いたのです。神様が「ほめたたえられますように」というのがこのしもべの祈りです。一番大事なことはしもべの功績ではありません。アブラハムのよい考えでもなかった。神様が「ほめたたえられ」ることが一番大事だということをご教えられるのです。私たちもそうです。何かすばらしいことがあった時、いいことがあった時、「やった！」と確かに心ではそう思いますが、神様、感謝しますと言わなければならないということをご教えられるのです。私が頑張ったから、本当にうまくできたから、そういうものではないとしもべは私たちに証しをしているのです。

3. リベカの決心 28-61節

1) ラバンとしもべ 28-44節

娘リベカは「走って行って、自分の母の家の者に、これらのことを告げた。」と。リベカにはラバンという兄がひとりいました。「外へ出て泉のところにいるその人のもとへ走って行った。」と、ラバンもまたリベカが帰って来た様子を見て、どんな人かなと思ってその人の所へ行きました。「彼は鼻の飾り輪と妹の腕にある腕輪を見、また、『あの人がこう私に言われました。』と言った妹リベカのことばを聞くとすぐ、その人のところに行った。」、確かにリベカのもらったプレゼントを見るとただのものではないということがわかります。リベカは非常に高価な金や銀の飾り物を、行く時にはしていなかったのに帰って来たらしめていたのです。「その人」、しもべは泉のほとり、らくだのそばに立っていました。そこでラバンは「どうぞおいでください。主に祝福された方。どうして外に立っておられるのですか。私は家と、らくだのための場所を用意しております。」と言います。リベカに会ってすぐに出て来たからまだ用意はできていなかったはずですが、これはラバンの歓迎の言葉です。もう準備できているから遠慮しないで来てくださいよというわけです。「それでその人は家の中にはいった。らくだの荷は解かれ、らくだにはわらと飼料が与えられ、その人の足と、その従者たちの足を洗う水も与えられた。」、旅を続けていて足が汚れているから足を洗う、当時の習慣ですね。「それから、その人の前に食事が出され」るわけですが、その人は食事を前にして「私の用向きを話すまでは食事をいただきます。」と言うわけです。そこでラバンはどうぞ「お話しください。」と言います。その人は、実は「私はアブラハムのしもべです。」と。この「アブラハム」という名前を聞いた時にラバンはすぐこれはおじさんだとわかるわけです。そして、「主は私の主人を大いに祝福されましたので、主人は富んでおります。主は羊や牛、銀や金、男女の奴隷、らくだやろばをお与えになりました。私の主人の妻サラは、年をとってから、ひとりの男の子を主人に産み、主人はこの子に自分の全財産を譲っておられます。」、そしてこの主人アブラハムが言うのです。「私が住んでいるこの土地の……」ということで、アブラハムがしもべに命じたことをラバンに説明します。そして私が旅を続けて来たところ、あなたの妹さんのリベカさんに出会いましたと、成り行きを説明しました。42-43節を見ると、「きょう、私は泉のところに来て申しました。『私の主人アブラハムの神、主よ。私がここまで来た旅を、もしあなたが成功させてくださるのなら、ご覧ください。私は泉のほとりに立っています。』」と言って、リベカさんと出会いました。本当にリベカさんは優しいお嬢さんで私だけではなくて、10頭のらくだにも、またしもべたちにも水を飲ませてくださったのです。この娘さんこそ「主が私の主人の息子のために定められた妻でありますように。」と祈っていた時にリベカさんが来られましたという話をずっとラバンに説明するのです。

2) ラバンとベトエルの答え 50節

そして50節を見ると、ラバンやお父さんのベトエルが答えて言います。「このことは主から出たことですから、私たちはあなたによしあしを言うことはできません」。彼らは偶像の地に住み、テラは多くの神々に仕えていた。恐らくラバンもそのような者であったかと思うのですが、本当に不思議なことに彼らの答えは「主から出たことですから、私たちはあなたによしあしを言うことはできません」でした。恐らくなぜアブラハムがカランから行き先もわからないまま、ロトや家族の者を連れて出て行ったのか、そのいきさつを知っていたものと思われる。だからあのアブラハムおじさんの信じている神様から出たことだから、私たちはよいとか悪いとか言うことはできないと、ラバンとベトエルは答えるわけです。51節「ど

うか連れて行ってください。主が仰せられたとおりに、あなたの主人のご子息の妻となりますように。」、これが彼らの答えでした。

3) リベカの決心 51-61節

53節「そして、このしもべは、銀や金の品物や衣装を取り出してリベカに与えた。また、彼女の兄や母にも貴重な品々を贈った。」とあります。そしてやっと食事にありついて一晩寝るわけです。朝になり、しもべは「私の主人のところへ帰してください。」と言います。目的は達したわけですから、一刻も早く帰ってこのよい知らせを主人とイサクに伝えたい、それがしもべの思いでした。ところが、ラバンとベトエル、またミルカは「娘を呼び寄せて、娘の言うことを聞いてみましょう。」と答えます。その前に彼らは、55節「しばらく、十日間ほど、私たちといっしょにとどめておき」たいと言いました。何せ突然の話だからその間に別れを惜しむから待ってくださいと。でもしもべはすぐ連れて帰りたいということで、何よりリベカの意見が一番大事だからと娘を呼びました。そして58節に「リベカを呼び寄せて、『この人といっしょに行くか。』と尋ねた。すると彼女は、『はい。まいります。』と答えた。」とあります。恐らく彼らの期待はもうしばらく両親や兄弟と別れを惜しみたいから少し待ってほしいと言うかと思ったのです。だから自分はいいと思うけれども妹に聞いてみてよと言うわけでしたが、意に反してリベカの答えは「まいります」、すぐに行きますということでした。59節「そこで彼らは、妹リベカとそのうばを、アブラハムのしもべとその従者たちといっしょに送り出し」、そして60節「われらの妹よ。あなたは幾千万にもふえるように。そして、あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように。」という祝福のことばをかけるのです。そして一行は旅立ちます。

4. イサク、リベカを妻にする 62-67節

彼らがカランを後にしてもとの所へと出かけて行った。そして何日かたつたころだと思いますが、62節「そのとき、イサクは、ベエル・ラハイ・ロイ地方から帰って来ていた。彼はネゲブの地に住んでいたのである」と。イサクはネゲブの地に住んでいて、ベエル・ラハイ・ロイという地方から帰って来ていたと。これは創世記16章にあるように、サラにイサクが与えられた時に意地悪されてハガルが追い出されるのですが、その時に神様がこのハガルに現れた。その時のことが原因として名前がつけられたと言われています。「ベエル」というのは「井戸」です。「ラ」は「〇〇の所有の」、「ハイ」は「生きておられる」です。だから「生きておられる方所有の井戸」という意味です。「ロイ」は「顧みられる」です。ハガルは主は私を顧みられた、後ろを振り返って見られた、こんな私をも見ておられるということに基づくところですが、そこから帰って来ていたというわけです。

夕暮れになってイサクは散歩をしています。あたりは恐らく夕焼けが本当に美しく、雲がたなびいて、そしてたそがれになってそろそろ星も出ようかという、そのような時に、彼は物思いにふけて歩いてたんでしょね。考えてみたら寂しいですよ。でもその時にふと目を上げて見ると、らくだが近づいて来たというわけです。また一方、旅を続けていたリベカもらくだの上から彼を見つけたのです。「目を上げ、イサクを見ると、らくだから降り」てきた。そしてしもべに尋ねるのです。「野を歩いてこちらのほうに、私たちを迎えに来るあの人はだれですか。」、非常にロマンティックな出会いがここにあるわけです。すばらしい出会いだと思いますが、しもべは答えます。「あの方が私の主人」イサクです。「そこでリベカはペールを取って身をおおった。」とあります。(63-65節)

当時の習慣として女性は婚約が成立した時、結婚するまでは男性に顔を見せないということで、顔を覆う習慣がありました。このリベカのとった行動によって本当に彼女はイサクを婚約者としてはっきりと確認したということを見ることができます。そしてしもべはこういうことがあってこの娘さんを連れてまいりましたとイサクに告げました。「イサクは、その母サラの天幕」、3年前に亡くなってもう母のいない天幕にリベカを連れて行き、「リベカをめとり、彼女は彼の妻となった」と書いてあります。「彼は彼女を愛した。イサクは、母のなきあと、慰めを得た。」と。40歳になってイサクはすばらしい結婚をしたということです。このようにしてイサクの結婚は無事に成立をしたことを私たちは知ることができます。イサクとリベカはしもべの働きによってすばらしい結婚式を挙げたと。(66-67節)

B. 新約聖書の解き明かし

1. アブラハムは父なる神の型

さて新約聖書ではそのことをどのように教えているかというと、新約聖書はアブラハムは父なる神の型であると教えています。旧約と新約はあくまで二つそれぞれが互いにその意味を教え合っているわけですが、「信仰の父」、「すべての人の父」と今私たちはアブラハムを呼んでいます。ローマ4:11-12「彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。」、割礼を受ける前に彼は信仰によって義と認められ、その後、8日目に割礼を受けなさいと神様に割礼を命じられました。だから信じる前の者にも、信じた後の者にも、すべての者

にとって父となる。「私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるため」、まさに信仰の父であるアブラハム、これは父なる神の一つの型を表していると考えられます。

2. イサクはひとり子なる神キリストの型

そして、そのアブラハムは一人息子のためにしもべを遣わすのです。このしもべは私たちを救うために神様が送られた聖霊の型であると考えられるわけです。イサクはひとり子イエス・キリストの方であるということをお教えるのです。アブラハムは父なる神、イサクはひとり子キリスト。

1) キリストは神の約束によって生まれ、イサクも神の約束によってアブラハムとサラに与えられた。

救い主として与えられる、世の罪を取り除く神の子羊が与えられるというのは、旧約の時代からさかのぼって、創世記3：15から聖書は教えています。

2) キリストはおとめマリヤから生まれ、イサクは神の定められた時に死んだも同然のアブラハムというサラから生まれた。

この約束によって神でありましたが、ひとりの人としてのからだをとってマリヤから生まれた。

3) キリストは神のひとり子であり、イサクも神の約束のひとり子として生まれた。

4) キリストが贖いの子羊としてご自身を捧げられたように、イサクも全焼の犠牲として捧げられた。

5) キリストが死からよみがえられたように、イサクも三日目に神が備えられた子羊によって死ぬべきところを免れた。

6) とともに幼いころの記録がない。

本当に記録どころか、イサクの語ったことばは一言記されているだけであるにもかかわらずこのようにすばらしい物語が記されているのです。

7) 父の言うがままに行動した。

イサクは「どうして?」とか「いやだ」とかそういうことは一切言いませんでした。

8) 父によって妻を得た。(キリストは花嫁である教会を・イサクはリベカを)

妻まで自分の意に沿う者を選べないのか、そんなことは言いませんでした。父親がそのような心配りをして祈って与えられた娘がその妻であ利、彼はずっと従っていました。そして彼は妻を得ます。キリストは花嫁である教会を、イサクはリベカを神様によって与えられたというわけです。

3. しもべは花嫁をキリストに導く聖霊の型

三番目を見ると、しもべは花嫁をキリストに導く聖霊の型であるということです。

1) 父はもうひとりの助け主を ヨハネ14：16

どのようにかということ、ヨハネ14：16「父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」と語っています。

2) 父のもとから遣わす助け主 ヨハネ15：26

そしてまたヨハネ15：26では「わたし(イエス様)が父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」、イエス様のことをあかしするのは「真理の御霊」だと言うのです。アブラハムについてイサクについてどんな人か、何のために来たか、そのことを伝えるのはしもべでしたが、そのしもべはこのようにして聖霊の型であるということをお教えられるのです。

3) 御霊は自分から語るのではない ヨハネ16：13

ヨハネ16：13で「御霊は自分から語るのでは」ありませんと言っていますが、「すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」とあります。「自分から語るのではなく、聞くままを話」す。まさにしもべが自分の考えですべてを計画したのではなくて、聞くままを、すなわちアブラハムが言ったとおりのことをしているというわけです。そして結果については父なる神に、アブラハムの神に委ねている。まさにその祈りが聞かれたということを見ることができるのです。

4) 御霊は神のみこころに従って働く ローマ8：27

ローマ8：27に「御霊は、神のみこころに従って、」働くと言われています。神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださると言うのです。自分の考えではない、アブラハムの意に沿って行動する。まさに神様のみこころに沿った働きをするというわけです。

5) 教会に属する者に聖霊の証印を押されているのです エペソ4：30

教会に属する者に聖霊の証印が押されるとエペソ4：30では記しています。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」と記されています。しもべが決心を聞き出したように罪人の悔い改めと信仰告白に基づいて私たちが神の子とされるその証印を聖霊が押されるということです。しもべはリベカが本当に神様の準備された娘だということを確認しました。私たちが救われるのも聖霊の証印を押されると書いてあります。私たちの行いではありま

せんと言っているのです。しもべの行いではなく神様の働きだった。救いは決して行いによるのではないと聖書は教えています。恵みによって、信仰によって救われると、エペソ2章には記しています。証印を押されるということはその証印は二度と取り消されることはないということです。このリベカとイサクの結婚はもう二度と取り消されるものではないということですが、私たちとイエス・キリストの結婚もそのように取り消されるものではないと。本当の信仰の持ち主には必ず聖霊の証印が押されているということを聖書は教えています。

4. 花嫁リベカはキリストの花嫁＝教会の型 IIコリント11:2

まさにリベカはキリストの花嫁である教会の型だということをIIコリント11:2では言っています。「私(パウロ)は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがた(教会)を、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め」た、あのリベカがイサクのために花嫁に定められたごとく教会を「キリストにささげることにした」というわけです。黙示録21:9には教会は「小羊の妻である花嫁」として迎えられることが記されています。「最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。『ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。』」と言うのです。やがて私たちはキリストの花嫁として迎えられるということがここで約束されているのです。

どのように？リベカが決心したように私たちはすべてのものを捨てて神様に従うのです。ピリピ3:8「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと思っています。」、またルカ18:29-30では「イエスは彼らに言われた。『まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。』」、リベカはお母さんとお兄さんからどうしますか？と聞かれた時に、行きますとすぐに答えました。何か持って行くものがあるかもしれないから探す時間が欲しいとかそういうことを一切言いませんでした。親や兄弟ともうちょっと交わりしたいと言いませんでした。呼ばれた時に本当にすぐ彼女は立ち上がって「行きます」と言ったと。まさに私たちが「あなたはイエス・キリストをあなたの救い主としてお信じになりますか」と聞かれたとき、「私は信じます」、これがリベカの型としての信仰です。その時神様は聖霊の働きを持って私たちにキリストの花嫁として迎えてくださると聖書は教えています。

終わりに：

アブラハムはこのようにして父なる神、またイサクは子なる神キリスト、しもべは聖霊の型であるということを旧約聖書は教えています。また神様は子なる神キリストによって私たち罪人が救われることを教えています。この救いのご計画がまさに創世記が始まってすぐに原始福音と言われる創世記3:16の約束以来、徐々に明らかにされていくということを見ることができます。まだまだ旧約聖書はずっと続いていくわけですが、その初めの創世記にあってさえ、神様はすばらしい救いの計画を私たちに記しておられるのです。

エペソ1:4-6を読んで終わりたいと思います。

4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。

5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。

6 それは、神がその愛する方(イエス・キリスト)にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

あのしもべは感謝の祈りを捧げて神様に栄光を帰しました。私たちが救われるその目的は神様の栄光がほめたたえられることです。すばらしいことに「世界の基の置かれる前から」私たちが神様によって選ばれる。救われる者はそのような者だと聖書は教えています。だれが選ばれているのか、もちろん私たちにわかりませんが、既に救われた皆さんはイサクの妻リベカのように選ばれた花嫁であるというわけです。

でもまだ神様を信じておられない方がこの中におられたとしたら、神様はイエス・キリストの花嫁としてのあなたを待っておられます。あなたが何かをしなければ神様は救ってくださらないということは決してありません。私たちの行いによって救われるということを聖書は教えていません。神様の恵みによってあなたを救ってくださるということを聖書は教えています。ただ私たちに大事なことは、私たちに罪があるということを知っていなければならないということです。でなければ、私たちに神様の愛が理解できないと聖書は教えています。本当にそのことを望まれる方がおられたら、礼拝が終わってから救われているお隣の方に声をかけていただいて、もっと知りたいと言っていたらと思います。